

## 選択の自由

☉神は、人間を律法のもとにおかれたが、これ（→律法）は、人間が存在するためには、不可避の条件であった。人間は、神の統治に従う者であり、律法のない統治はあり得ない。神は、神の律法を犯す力のないものとして人間を造ることもおできになった。また、アダムの手が禁果にふれないように、彼の手をおさえることもおできになった。しかし、それでは、人間は道徳的自由意志の持ち主ではなくて、単なる機械人形になってしまう。選択の自由がないと、彼の服従は自発的なものではなくて、強制されたものとなる。品性が啓発されることもあり得なかったであろう。こういう方法は、神が他の諸世界の住民を取り扱われた計画と相反したものであったことだろう。人間は知的存在者としての価値を失い、神の支配は専制的だというサタンの非難が正当化されたことであろう。

—人類のあけぼの 第2章 天地創造のいわれ—

☉イスラエルの人々は、反逆罪を犯した。しかもそれは、彼らに豊かな恵みを賜った天の王に対してであった。彼らは、自分から進んで、その王の権威に従うことを誓っていたのであった。天の統治を維持するためには、反逆者に罰を与えなければならない。ここにおいても、なお、神の憐れみがあらわされていたのである。神は、律法を維持されるとともに※1、**選択の自由**、すなわち、すべての者が悔い改める機会をお与えになった※2。反逆しつづける者だけが、殺されたのである※3。

—人類のあけぼの 第2章 シナイでの偶像礼拝—

→神は正義を持って律法を守られるが、それと同時に、人々に悔い改めるの機会を与える慈悲深さも持っている。しかし、その機会を拒み、反逆を続けた者には裁きが下される。

※1 「神は、律法を維持されるとともに」＝神はご自身の定めた律法（道徳的・宗教的な掟）を変わずに守り続ける、つまり、正義を貫かれるということ。

※2 「選択の自由、すなわち、すべての者が悔い改める機会をお与えになった」＝神は人々に自由意志を与え、悔い改めるチャンスを用意されていた。つまり、過ちを犯したとしても、心から悔い改めるならば、赦される機会があったということ。

※3 「反逆しつづける者だけが、殺されたのである」＝しかし、与えられた悔い改めるの機会を拒み、なおも神に背き続けた者に対しては、最終的に裁きが下り、命を失うことになったということ。

☉神に対して同じ反抗的不満をくり返している人々が、今日も大勢いる。彼らは、人間から**選択の自由**を奪うことは、知的存在としての権利を取り去って、人間を単なる機械人形にしてしまうのに等しいことを理解していない。意志を強制することは、神のみ旨でない。人間は自由意志を持った道徳的存在として創造された。他の諸世界の住民たちと同じく、人間は、従順か否かの試みを受けなければならない。だが、人間は必然的に悪に負ける立場に置かれているのではない。人間が抵抗できないような誘惑や試練は、1つとして襲ってくるのが許されていない。神が十分の備えをしてくださったから、(本来)人間はサタンとの戦いにおいて決して敗北する必要はなかったのである。

—人類のあけぼの 第2章 律法に対するサタンの敵意—

**【参考】**「生き残る人びと」第4章 誘惑と堕落 人間の選択の自由